平成 30 年度　学位（課程博士）申請論文

論文題目：　西欧中世初期における病と治癒

提出者：　アシコル玉美

要約

本論文はこれまでの医学史研究では軽んじられることの多かった西欧の中世初期を中心として、医学知識や医術のみならず病因の理解、病者の扱い、医師の社会的地位、教育といった医療全般を見渡して当時の状況を明らかにすることを目的としている。ここでいう西欧とは、かつてカロリング期フランク王国の勢力下にあった地域、すなわち現在のドイツ、フランス、ベネルクス、スイス、並びにイタリアとスペインの一部を指す。また、西ローマ帝国が支配していたアフリカやビザンツ帝国に関する史料も、フランク王国の状況を知るための手がかりとして参照している。イングランド、スコットランド及びアイルランドは本研究では史料の都合上対象外とする。

近年まで中世医学史は医学に関する著作を主たる史料とし、医学知識の水準、教育、瀉血などの処置、薬草の使用といった医術を中心として進められてきた。イタリア半島やイベリア半島におけるアラビア語からラテン語への翻訳によって東方の科学技術がもたらされ、大学が興り、ヨーロッパにおける高等教育の様相が大きく変化した中世の半ばは、医学史においても大きな転換点のひとつであるとされている。西ローマ帝国の崩壊後ギリシアの医学説が西欧に広く知られるようになったのは、イスラームとの接触の機会の多かったイベリア半島及びイタリア半島とその周辺を除けば、11 世紀よりも後の時代であるというのが医学史研究者の間では通説であった。中世初期は依然として暗黒の時代とみなされており、この時代の文化的な功績は古典古代の知識をかろうじて後代に伝えたにすぎないという偏見も残っていた。

中世の医療行為について知ろうとするのであれば、従来のような医学書の写本を用いた研究では限られた情報しか得られない。写本研究はそれ自体では中世初期にギリシア医学がどの程度知られていたかという問題を写本の所在から推測することを可能にするのみであり、当時の人々がどのように病を治療していたのかという実態を明らかにするものでは

ない。歴史叙述や法などにも病と治療に関する記述がみられるものがあることが知られている。したがって本論文では、中世初期の人々が病に罹った際に誰に頼り、何を用いて治療をしたのかを論じるべく、医学書、歴史叙述、聖人伝、書簡、典礼書、法、証書等の病や医師、医術が登場する様々なテクストを用いた。

本論の全 3 章のうち第 1 章は、治療を受ける側の人間を対象として行った史料の調査結果に基づく考察である。中世初期の西欧はキリスト教がゲルマン諸部族にも広まり、民衆にいかに信仰をもたせ信徒として相応しい生活を送らせるかということが重要な課題となる時代であった。古代ギリシアに起源をもつ四体液説が医学の基本原理であったが、病因の理解はキリスト教の教義に合致したもの、すなわち神の懲罰や穢れ、悪魔憑きの結果生じるものであるという認識へと変化を遂げ、病の治療は赦しや悪魔からの解放といった宗教的救済と強く結び付けられたのである。修道院の共同生活の中において病者は隔離され、聖務日課や労働を免除されるよう戒律により定められていた。

第 2 章では治療者に目を向け、医師を意味するラテン語 medicus が誰を指しているのか、医師と称されたのは誰であったのか、医師がどこで養成されたのかを論じた。古代ギリシアの医学説や医術に精通した専門家としての医師の他、キリスト教の教義においては神、キリスト、天使、聖人が治癒の力をもつ医師とみなされた。聖人伝ではギリシアの医学説に基づいた治療をする医師がときに無力な存在として描かれているが、それは聖人がもつ奇跡の力を強調するためである。キリスト教がそのような世俗の医師を軽視していたわけではなかった。世俗の医術を施す医師は西欧においても多くがギリシア人であったが、ローマ帝国の遷都や東西分裂、そして西ローマ帝国の崩壊に伴いギリシア人医師は西欧から去っていった。メロヴィング期には奴隷が医術を学び王の侍医になる事例がみられる。聖職者や修道士が医師になる傾向は 5 世紀からすでに見られたが、カロリング期にはより顕著となった。不信仰やキリスト教の教義にそぐわない思考は魂の傷や病であると理解されており、聖職者は身体の病を癒す医師であったのみならずこのような魂の不調を癒す魂の医師としての役割も求められていた。医師の養成はビザンツ帝国の影響下にあったイタリア半島ではギリシア語学校で行われていたが、アルプス以北の地域ではギリシア医学に触れる機会が失われていったことは否めない。カロリング期にはカール大帝が教会における医術の教育を奨励する勅令を出した。修道士の教育について書かれたカロリング期の他のテクストにも

医術を重視する旨が記されているが、これは魂の医師としての聖職者の役割を重視するものであると考えらえる。

第 3 章は治療法が主題である。キリストや聖人による悪魔祓いや奇跡の治癒ではなく、生身の人間である医師が治療を施した空間、外科的処置、薬草を用いた治療、塗油の儀式による治療とその意義の変遷について論じた。都市や修道院に設立された xenodochium は巡礼者のための宿泊施設であり、貧者に施しを与える場所であり、そして病者の世話をするための空間でもあった。この xenodochium がもととなり、『ベネディクト戒律』の規定をとりいれた修道院は病者の世話をするための施設をもち、薬草園で薬用植物を栽培するようになった。都市の xenodochium には公共の医師がいたことが知られている。ザンクト・ガレン修道院において 9 世紀に描かれた理想の修道院を体現した見取り図が発見されたが、そこにも医師の部屋が他の宿舎等から独立して設けられている。医師は薬草の処方だけでなく、外科手術や瀉血など処置をする知識と技術ももっていたと考えられている。修道院の蔵書には世俗の医術に関する書物もあった。8 世紀末あるいは 9 世紀初頭に修道士たちが薬草治療の処方集『ロルシュの薬方書』を著した。手稿本 1 点のみが残存しているため、その治療法が広く受容され実践されたという証拠はない。しかし古代ギリシアの医学説にも言及していること、具体的な適応症と処方内容、調製法、用法用量まで詳細に記載していることから、当時の医学知識を測る上での重要な史料であると言える。同書の序ともいえる「医学への弁明」を見る限りでは、キリスト教徒からみた異教徒である古代ギリシアの人々が生み出した知恵と知識に頼ることに対し罪悪感や嫌悪感を抱く人が当時から存在していたと考えられる。とはいえキリスト教社会は古代ギリシアの医学及び医術を受け入れ、11 世紀頃よりアラビアを経由してその知識が再流入するまでの間もその伝統をつないでいた。ギリシア医学の衰退はキリスト教による拒否が理由ではなく、ギリシア語の知識がなかったことがその要因であった。聖職者が行うもうひとつの治療法に塗油がある。これは『ヤコブの手紙』の記述がもとになっていると考えられている儀式であるが、もともとは病める人に祝別した油を塗ることで治癒の力を与えるというものであった。ところがこの儀式は次第にその意義を変え、死に瀕した者が現世での罪を洗い流して天上へ旅立つための準備としての典礼へと姿を変えていく。その変化の兆しがみられるのがカール大帝の勅令及びオルレアン司教テオドゥルフのカピトゥラリアによれば、8 世紀頃であると考えられる。しかし実

際には病の治療としての塗油が継続していたことが、10 世紀マインツで作成された『典礼順序の指南書』及び同じころにフライジングで成立した『フライジングの文化遺産』と呼ばれる典礼の手引書からわかる。

キリスト教は病の治癒に新たな概念を付加した。それは救済である。神の懲罰や悪魔憑きである病が癒えるということは、罪の赦しと悪魔からの解放を意味する。神あるいはキリストが医師として人々の病を癒したという聖書の記述から発生した「天上の医師」ないしは「医師キリスト」の概念は聖人にまで及び、治癒の奇跡を起こす聖人はとくに人々の崇敬を集めた。治癒がすなわち「救済」と同義であった中世のキリスト教世界では聖職者は「魂の医師」として、罪という魂の傷を負った人々のケアにあたる使命を背負っていた。魂の傷を癒すための手段は告解と改悛であった。塗油の意義が変化の兆しをみせる 8 世紀はまさに告解と改悛が重要視され、聖職者に「魂の医師」の役割が求められるようになった時期なのである。教会史研究において塗油の意義の変遷は、カロリング期に告解と改悛の必要性が説かれたこと、そして典礼のあり方が変化したことと関連付けられている。キリスト教による病因の理解の変化とそれに伴う治癒がもつ意味の変化の延長線上に、「魂の医師」の概念の普及と告解及び悔悛の意義の増大といった、中世初期の教会での様々な変化の延長線上に後世における死に対する儀式のあり方が見えてくる。時代とともに塗油の意義や実施方法が異なるものになったとしても、それが魂を癒す「救済」であるということには変わりはないのである。

本論文は宗教的な意味合いの強い治療行為と古代ギリシア由来の世俗の医術の双方をまとめて取り扱っている。中世のヨーロッパにおいては身体の病と霊的な問題がしばしば区別されず、その境界がはっきりとしないためである。これまでの医学史研究は世俗の医術をテーマとし、そして霊的な問題への対処は神学や教会史において議論されてきた。キリスト教がすべての中心にあった西欧中世の文化的あるいは社会的状況を考察するにあたり、このように研究分野が明確に分けられていること。本研究はあくまで医学史研究という立場に基づく論考ではあるが、そこに神学及び教会史研究の成果を取り入れるという試みでもある。